

第 15 回「イクメンの星」に選定された芦田崇さんのプロフィールと体験談

ニックネーム	あしやん
本 名	芦田 崇 (あしだ たかし)
職 業	会社員
年 令	40 歳
イクメン宣言	
女性の社会進出に比例した男性の家庭、育児進出を目指し、四姉妹のわが子たちを含めた次世代を担う子たちが過ごしやすい社会になるように！！	
育休・育児体験談	
<p>第三子懐妊とほぼ同時期の育介法改正により、妻が育休中でも私の育児休業の取得が可能になり、思い切って半年間の育児休業を決めました。</p> <p>第一子の時は、初めての育児でわからないことだらけで右往左往でしたが、親二人に子どもが一人。妊娠中からお腹の赤ちゃんに対して、いろいろと父親になる心の準備も少しずつでしたが、出来ていたように思います。また妻が出産のために入院した折は、当時はまだ珍しい立ち会い出産で、入院中もほぼ一緒に寝泊まりし、スタッフの方にずっと病院にいる変わった（熱心な？）パパだと思われていたようです。妻が職場に復帰後は、毎日保育園に送迎。通い始めた頃、保育士さんに「パパと泣く子は珍しいです」と言われていました。共に過ごす事は育児において、密接な親子関係の礎を作る貴重な時間であると、あらためて感じました。また自分自身が親として成長するためのステップでもあると感じました。</p> <p>育児休業を取得すると、収入が減り生活は厳しくなります。両親や祖母からは、「男性がそんなに長期間仕事を休んで大丈夫か。休む必要があるのか。」などと心配や反対もされました。しかし、男性の育児休業取得について、制度はあっても利用する人がいないのでは意味がないとの思いや、女性の社会進出に比べて男性の家事・育児参加が進んでいない現状を踏まえて、男性の産後休業の義務化があってこそ本当の男女共同参画ではないかとの持論もありました。また、職場で男性の取得は初めてで、取得することが正しいのかという自分の中での葛藤に加え、仕事の引き継ぎ、職場の理解を得るための調整の大変さもありません。しかし、仕事には自分の代わりがいても、この子たちの父親は私一人しかいないと考え、思い切って取得することにしました。</p> <p>現在は、第四子の育児のために2度目の育児休業を半年間取得後、育児短時間勤務を取得して仕事に、育児に、家事に充実した毎日を家族で満喫しています。</p>	

第15回「イクメンの星」に選定された今田尚輝さんのプロフィールと体験談

ニックネーム	Naoki
本名	今田 尚輝（いまだ なおき）
職業	公務員
年齢	40歳
イクメン宣言	
<p>趣味は育児。目指すはイクメン。</p> <p>それが楽しくてカッコいいと思えるような「空気」、男性の育児参加が当たり前となる「空気」を創り出す。微力でも集まればきっと大きな力になる。</p>	
育休・育児体験談	
<p>愛車のバイクを売って僕が購入したのは、三人乗り対応の自転車だ。前の席に息子を、後ろの席に娘を乗せて、保育園の送迎をする。敢えてなるべく車を使わないようにしている。道端に咲く花、鳥のさえずり、空の青さ、太陽の暖かさ、風の心地よさ、季節の移り変わり。この世界の素晴らしさを、肌で感じてほしい。そしてときには、夏の暑さや冬の寒さ、強い向かい風といった厳しさも肌で感じて、それに負けない強さを身につけていってほしいと思う。自転車に乗れない冬は、雪道をそりに乗せて引く。ほとんどの人が車を使っている中で、珍しがられるが、子供たちもこれを気に入っている。</p> <p>職場では、何よりも仕事を優先しなければいけない「空気」、残業をしなければいけない「空気」、休みを取ってはいけない「空気」があり、皆がその空気を読んで仕事をしてきた。しかし、僕はそんな中で育児休業を取得し、復帰後も支援制度を活用し、育児と仕事との両立をさせてもらっている。</p> <p>時差出勤の利用、看護休暇の利用、残業の免除申請について、人事課と直属の上司に直接働きかけた。時差出勤・残業の免除については、自分だけが他の人より早くに職場から去ることをいぶかしむ人も予想されたことから、上司から皆に周知してもらった。また、看護休暇については突発的に仕事を休むことがあるため、サポート体制の構築について上司および周囲の同僚に働きかけた。さらに法律に定められている勤務地の配慮についても人事課に働きかけたが、残念ながらこれについては希望は叶わなかった。</p> <p>育児の支援制度を活用するにあたり、必ずしも自分の思惑どおりにはいかなかった。当然のことだが、やはり快く思わない人もいた。心ない言葉を投げかけられ、パワハラを受け、思わぬ異動を余儀なくされ、挫けそうになったこともあった。しかし、僕が予想しなかったのは、意外なことに、味方になってくれた人もたくさんいたということだ。同じく育児している職員を中心に、激励の言葉もたくさんいただいた。僕は決してひとりではなかったのだ。多くの人に支えられて、それを乗り越えて、今の自分がある。僕はそれを誇りに思う。</p>	

自分が育児休暇を取得し、支援制度を活用したことで、職場に男性の育児参加についての関心が生まれた。結果的に、「仕事優先」という職場の空気に一石を投じることとなり、「仕事も大事。家庭も大事」という空気が生まれた。

「空気」は読むものではない。創り出すものだと思う。徐々にではあるが、男性の育児参加についても理解を得られるようになってきて、他にも育児休業を取得する男性職員が現れたときは嬉しかった。微力ではあるが、社会が良い方へ向けて変わっていく力に自分がなれるのだとしたら、その力を惜しまずに発揮していきたい。小さな力でも、合わされば大きな力となり、新たな空気を創り出せるはずだ。社会はもっと、子育てに優しくなれる。

「子育て」と言えば、男性にとっては大変なイメージが先行し、仕事への影響とか、心理的・経済的な負担とかもあって、結婚も出産も躊躇する人が少なからずいる。確かに自由な時間は減り、趣味であったバイクも、映画鑑賞も、ゴルフも、ギターも、今は楽しむ暇はないが、不思議なことに、それを不満だとは思わない。なぜならばもっと面白く、大きな喜びがそこにあるからだ。

趣味は育児。目指すはイクメン。もっともっと多くの人に、子育ての面白さを伝えたい。そして男性の育児参加を呼び掛けていきたい。そしていつか、男性の育児参加が当たり前となる「空気」を創り、それを広げていく力になりたいと思う。